

主張

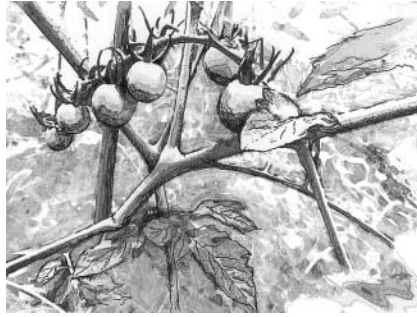
鯉を育てる

川越豊彦

事務局から「健全育成」にふさわしい巻頭言をというお題をいただき、原稿を執筆しています。今は三月末、新型コロナウイルスの猛威は世界中に広がり、国内でも収束の兆しは一向に見えず、臨時休校が未だ続いています。その最中、先日、本校でも規模を縮小して卒業式を行いました。卒業生、教職員、保護者は一家庭二人まで、在校生は代表生徒のみ、飛沫感染を防止するため会場の窓を開け、式歌、合唱、校歌を含め歌は一切なし。歌のない歌謡曲ならぬ歌のない卒業式は、教員生活三五年で初めての経験でした。（しかし、それでは寂しからうと音楽の先生に手伝ってもらい、校長式辞の最後に「乾杯」を卒業式バージョンに替えて歌ってしまいました。）

この拙稿をお読みいただくのは三か月後の六月と聞いています。卒業の時期、子供たちが「一〇年後の自分へ」という題で作文を書くことがあります、それにならって少し紙面をお借りして「三か月後の中学校へ」を書きたいと思っています。

「三か月後の中学校へ」：四月には学校が再開し、入学式を無事、実施して、新入生を迎えることができたでしょうか。学校では、教室、校庭、体育館で子供たちの元気な声が響き渡っているでしょうか。未指導の内容を工夫しながら指導し終えたでしょうか。修



学旅行に出かけ、思い出をたくさんつくることができたでしょうか…いつもの学校生活を取り戻し、あんなこともあったね、と言えているでしょうか。

さて、本題の「健全育成」について私なりの考えを述べさせていただければと思います。三代前の榎本智司会長が機関誌「中学校」の中で、各自治体が定める「健全育成条例」を調べて「健全育成」について次のように定義されています。「自治体、保護者、自治体の住民、事業者等が、それぞれの責務を自覚し、子供を取り巻く環境を整備し、子供の成長を阻害する行為から保護することを通して、心身ともに健やかな子供を育成すること」。言い換えれば、「大人が環境を整え、子供を守り育てる」ということになると思います。このような社会環境を創り出すことは、「あるべき姿」として掲げ、目指すことは大切ですが、社会や家庭の教育力低下が指摘される中では、「絵に描いた餅」になりはしないかと危惧しています。清流のような社会環境の中で子供たちを育成することは目指すべき姿だと思います。しかし、実際の社会は、新型コロナウイルスのように答えの見つからない課題が山積し、子供たちの周囲には、誤った情報、有害な情報があふれ渦巻いています。子供たちは、今、清流ではなく泥流の中で生きており、この泥流を清流に変えることは至難の業だと思います。「健全育成」を目指す私たち教職員がすべきことは、泥の中でもたくましく生きる鯉のように子供たちを育てていくことだと思います。解答のない課題に対し、解答を見いだせる力、多くの情報の中から正しく有益・有用な情報を選び、活用できる力：そうしたこれからの時代に求められる力を確実に身に付けさせることが子供たちの健全育成につながるのではないのでしょうか。そうした力が身に付けば、鯉が滝を登るように、子供たちもきつと社会の荒波に挑戦し、明るい未来社会の創造主になってくれることと信じています。

(全日本中学校長会顧問・前会長)